

(三) パウル・シヨルツ Paul Scholz

在職期間 大正二年〜大正十一年 (一九一三〜一九二二)
外国人教師 担当科目 ピアノ

履歴 (要約)

- 一八八九年八月二十一日ドイツのライプツィヒに生まれる。
- 一九二二年ベルリン高等音楽学校を卒業する。在学中にメンデルスゾーン賞を取得。
- 一九一三年 (大正二年) 東京音楽学校教師に就任。同年十月十日奏任に準ぜられる。
- 一九二〇年 (大正九年) 十月二十五日高等官五等に準ぜられる。
- 一九二二年 (大正十一年) 八月三十一日退職。その後も東京に滞在し、三十年余りにわたって日本のピアノ教育界に貢献した。
- 一九四四年 (昭和十九年) 十月二日東京にて没。

音庶第四〇號 大正九年八月三日起案 決定 八月十六日決行

上 申 案

本校講師グスタフ・クロン及傭教師パウル・シヨルツノ兩人ハ
大正二年一月以降本校ノ授業ニ從事シテ勤勞ガアリマスカラ高等官
五等以上ニ準シ身分取扱ヒシマス様致シタイト存シマス本人ノ履歴
書ヲ添ヘテ上申致シマス

年 月 日

校 長

文部大臣宛

(手書き)

(外国人教師關係書類 自明治三十二年至大正十一年)

文部省 音祕四號

東京音楽学校傭教師

獨國人 グスタフ・クロン

獨國人 パウル・シヨルツ

右者自今奏任ニ準シ身分取扱ノ義協定相成候條此段及通牒候也

大正二年十月十日

文部大臣官房祕書課長

文部大臣祕書官 粟屋 謙印

(手書き) (外国人教師關係書類 自明治三十二年至大正十一年)

弔 辭

我國樂界ノ恩人パウル・シヨルツ師急逝ノ報ニ接シ哀悼ノ情ヲ禁
ズル能ハズ

師ハ音楽家ノ家ニ生シ、十二才ニシテハムブルグ市ニテ開催ノ音
樂演奏會ニ出演シ、ハムブルグ市音樂學校ニ入りテ指揮者マツク
ス・フィードレルに就キピアノヲ學ビドイツ皇帝及ハムブルグ市會
ヨリ學資ノ補助ヲ受ケ、伯林王立高等音樂學校ニ入りテハイソリッ
ヒ・バルト及エー・フォン・ドナーニーニ就キピアノヲ修業シ、在
校中コンクールニ參加シメンデルスゾーン賞與ヲ受クル等ピアノニ
トシテ卓越セル技倆ヲ有シタリ 大正二年一月我國ニ來朝東京音
樂學校ニ於テピアノ教師トシテ教鞭ヲ執リ爾來大正十一年八月ニ
至ル九年間ニ亘リテ銳意熱心ニ子弟ヲ訓陶シ我國樂界ノ進歩發展
目醒マシキモノアリ、幾多ノ俊秀相次デ師ノ門下ニ輩出シ現ニ活

躍セル我國ノピアノニストニシテ師ノ訓陶影響ヲ受ケザル者ナシト
イフモ過言ニ非ズ我國音樂文化ノ向上ニ寄與セラレタル功績恂ニ
顯著ナリ然ルニ今ヤ卒然トシテ逝カル師ノ溫容再ビ相見ル能ハズ
哀悼ノ念又極リナシ茲ニ謹ミテ弔辭ヲ靈前ニ捧グ幾ク人來リ饗ケ
ヨ

昭和十九年十月廿日

東京音樂學校長從三位勳二等 乘杉嘉壽

(手書き) (「祝辭弔祭文案」)

海内樂壇

十月五日午後二時より上野音樂學校奏樂堂に於て洋樂研究會の主
催にかゝるシヨルツ教授獨奏會があつた。恐らく從來日本で公開さ
れた洋琴演奏會中最大なものであつたらうと思はれる。寔にシヨル
ツ氏の此日の演奏は曲目の選擇の上から云つても、また演奏そのも
のについて云つても新しい記録を作つたものと云へる。來朝中の
或る洋琴家はマニラに居るスクラレフスキー教授を除けばシヨルツ
氏は全東洋に於ける最大の洋琴演奏家であると云つて居られたがま
ことにさうであらうと思はれる。演奏會に先立つ數日間毎日八時間
猛烈の練習を續けられたとのことである、シヨルツ氏でもなほさう
である。吾人は我敬愛する青年樂家の奮勵を希望せざるを得ない。
洋樂研究會が此好音樂會を開催して呉れたことも感謝すべきこと
で、路に當つた諸君の勞を多とする。

- 一、ベートーゼン、十五變奏曲と遁奏曲、作品三十五。
- 二、シューマン、謝肉祭小景、作品九。

三、ブラームス、二十五變奏曲と遁奏曲、作品二十四。
四、リスト、口短調、奏鳴曲。

十月七日午後七時半より神田青年會館に於てピアストウロ、安藤
幸、シヨール三氏の合同演奏會があつた。殊にピ、安藤兩人のバッ
ハの二重競奏曲などは當日の呼び物であつた。

一、合奏、ピアストウロ、安藤幸、シヨール三氏。

競奏曲、二短調……ヨハン セバステイアン バッハ

ギヴーチェ

ラルゴ、マノン トウロツポ

アルレグロ

二、ワイオリン獨奏、ピアストウロ

組曲、イ短調……シンディング

テムポ グイスト

アダージェヨ

プレスト

三、洋琴獨奏 シヨール

甲、イゾルデの愛死……ワーグナー

乙、練習曲圓舞曲……サン・サアンス

四、ワイオリン獨奏 ピアストウロ

甲、アエ マリア (シューバート)……ウヰルヘルミイ

乙、妖魔の舞曲……バツヅィーニ

五、合奏、ピアストウロ、安藤幸、シヨア

組曲、作品七十一……モスコフスキ

(イザベラ レパロアル夫人に捧ぐ)

アルレグロ エネルヂーコ

アルレグロ モデラート

レント アッサイ

モルト ギワーチエ

〔音楽〕第十卷第十一号 大正八年十月 三五〜三六頁

(四) グスタフ・クローン Gustav Kron

在職期間 大正二年〜十年(一九一三〜一九二二)、大正十一年〜十四年(一九二二〜一九二五)

外国人教師

担当科目 絃楽、声楽、和声学、作曲、合唱、管絃楽

履歴(要約)

一八七四年八月二九日ドイツのブラウンシュヴァイクに生まれる。

一八八九年〜一八九二年ヴァイマルに移り、ヴァイオリンをハリツクス、ピアノと音楽理論を宮中顧問官ミユラー・ハルトウングに師事する。

一八九二年ドレスデンの王立音楽院入学、カポルティ、ドレーゼケに師事する。

一八九六年〜一八九八年ハンブルクの学友協会にてソリスト、カペルマイスター。

一九〇〇年ベルリン・フィルハーモニー管絃楽団のソリストとなり、指揮者A・ニキシュのヨーロッパ演奏旅行に同行する。

一九〇四年R・シュトラウスのヨーロッパ演奏旅行に同行する。

一九一三年(大正二年)、A・ニキシュ、K・パンツェル、K・ギルテの推薦により、ユンケルの後任として東京音楽学校の外国人教師に就任。在

任中多くのベートーヴェン作品を本邦初演した(本百年史『演奏会篇第一卷』参照)。

昨日の上野樂堂

昨日午後二時から音楽學校學友會の第四回土曜演奏會があつた、會員の合唱に始まつて一部二部で九番の曲が進むうち長坂好子の高音獨唱で春の抒情調の餘裕ある唄ひぶりや、谷村なつ子のピアノ獨奏にバラツドの曲面白く、蜂谷龍子のヴァイオリンは非常な上達を示してゐたが慾にはもう一段冼えた音色を聞きたかつた併し當日の場に溢れた聴衆が待ち構へた聴き物は新任教師クローン、シヨルツ兩氏の初演奏であつた、拍手に向へられて登壇した兩氏はいづれも思つたよりは地味な音楽家であつた、曲はベートベンのソナタでこれまで本邦にては演奏されたことなき大物クローン氏の澄み切つたヴァイオリンとシヨルツ氏の天才的のピアノと相待つて軽い春の空氣の好ましいその中には息のつまるやうな恐しみを覺えさせるベートベンの藝術は遺憾なくその一面を傳へられた(け)

〔都新聞〕大正二年二月九日

ベートーヴェン第九交響曲の初演について

クローン氏の指揮で想ひ出すのは、なんと云つてもベートーヴェンの第九交響曲初演である。あの時は音楽學校の職員諸氏もクローン氏も本當に熱誠を籠めて事に當つたらしい。恐らく、當時の上野管絃樂團とその附屬生徒合唱團の技術をもつてしては重荷に過ぎるこの大曲を、相當の歲月練習して公表した。この時は何しろ吾が國